GR
白雲郷
とりわ
46
埼玉　名栗
昭和54年10月1日
宗教法人
白雲山
鳥居観音

表　紙　説　明

宗教法人
白雲山　鳥居文庫と大いちょう

本堂正面から右へ30米の所に鳥居文庫がある
重要文化財の仏像数体を始め沢山の珍らしい
文化財が収蔵され観覧に供されている
かたわらの大いちょうが黄葉をかざっている

とりゐ第46号目次

表　紙　白雲山の紅葉
開祖平沼桐江先生ご夫妻の
寿像建立を記念して……一
道光禅師御法話（其二十八）……三
観音行の実践　兵庫県光山善雄……六
西　遊　記（其三十九）　岡部千三……九
田　舎　医　者（其二十五）　見川鯛山……十二
鳥居観音だより……十五
裏表紙　鳥居観音地図
秋から新年のご案内

開祖平沼桐江先生ご夫妻寿像建立を記念して

開祖平沼桐江先生ととみ子夫人

この度桐江先生の寿像と、とみ子夫人の寿像が本堂前に建立され、除幕式は十一月三日挙式と相成りました。

昨年五月から当山役員及関係各位、多数の方からご協賛を賜り、又先生ご夫妻からの多大のご協力により、茲に建立することができました。

開創の歴史

平沼家、埼玉県入間郡名栗村上名栗三一九三番地に在って江戸時代から山林家として、近郷近在は云うまでもなく、県内にも有名です。

開祖桐江先生と、とみ子夫人

開祖平沼弥太郎（号桐江）先生は平沼家十世の父源一郎、母志げの長男として、明治二十五年六月十二日出生、名栗小学から、東京京華中学に学び、その頃から、非凡な才能が芽生えてきました。

とみ子夫人は福岡県山川町赤山、父鬼又彦、母セイの末娘として、明治二十九年七月二十九日出生、性温順、聡明長じて上京、武田錦子女史に学び女性としての教養を積まれ、大正三年縁あって桐江先生と結婚されました。

平沼家に入られたとみ子夫人は、名栗の環境と古い伝統と風習ある大家（たいけ）に一早く順応されました。

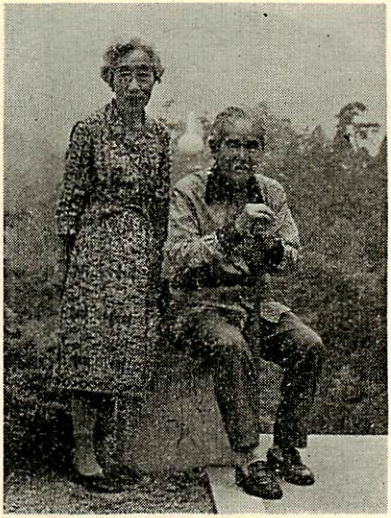
大正の末期から、昭和にわたり、桐江先生の要職は多く、それに関連する内助はすべて、とみ子夫人でありました。

政界、財界、実業界に多忙な、先生を扶けながら父母につかえ、家政を整え、信仰を持たれ、母の遺言を思い出され、その実現に先生ご夫妻は魂心、真

剣にとりくまれました。

計画、資材、仏縁、仏助、天才、彫刻、実現、と悲願数年、遂に昭和十五年春、今の開祖堂に聖観音を祀り開眼式が修行されました。

それから四十年の歳月が流れましたが、その間、広大な境内地が先生によって奉納され、本堂始め、仁王門、玄奘三蔵法師霊骨塔、鳥居文庫、玉華門、子育地蔵堂、救世大観音、写経塔、地球愛護平和観音、大鐘楼、山門等の堂塔が建立寄進されました。



桐江先生ご夫妻

桐江先生ご夫妻が、信仰厚く孝養一途にとは申しましても、なかなか、そんなわけには参りません。

観音信者であられた、母志げ様が観音さまになられて、お扶けがなければ不可能のことと思うほど不思議な力が発揮されたのです。

篤信者各位、講中の皆様、四方有縁の方々によって、こよなく愛されます当山は、歴史こそ浅いのですが、こんなに有名となったのも珍らしいです。

今や宗教法人白雲山鳥居観音は、現存なされる。開祖平沼先生ご夫妻を観音様のように敬慕されながら発展しつつあります。

時あたかも錦秋、白雲山の紅葉が朝夕の陽に、映えてかがやいています。

開祖桐江先生の寿像と夫人とみ子様の寿像が、除幕される佳い日が参りました。

先生ご夫妻が、自らの手によって開拓されたお山魂心込めて完成された建物と、仏像をこの世に贈られた、その行為に対し、参拝する人々は敬慕と信仰心を、身近に燃やされることでしょう。

道光禅師（故高階瓏仙猊下）御法話

自己（つづき）（其の二八）

精神がいろいろの問題で停滞すると、そこからいろいろの悩みがおこってきます。すなわち仏教でいう煩悩とはそれです。だから始終、精神には得脱無礙の円滑を得ておかなければなりません。ちょうど撞球の球がコロコロと転ずるように、自由自在の活動でなくてはなりません。すなわち妄相動乱の動きではいけません。五欲ということもつまり捉われからおこるものです。ゆえに「財に住する者は財に於て自在を得ず。」といわれます。朝から晩まで、もうけたい、つかみたいと考えている者は、かえってそのために失敗をまねくものです。

物はつかんだり放したりするところに活動の自由があるのです。道元禅師のおことばに「放てば手に充つ」ということばがありますが、まったくそうであります。握ったまま放さなかったならば、その物は握っているけれども、それ以外の他のものは握ることができません。だから握ることは必要ですが、それを放すことによって、なんでもつかめるという自由がりまあす。それをつかんだら牛の糞でも放さぬということになれば、もうその手では、それきり外の物はつかめません。

つぎに、「色に住するものは色において自在を得ず」というのですが、これは男女の関係問題、これも囚われれば身も心も財産もほろぼす禍いとなります。「食に住するものは食において自在を得ず」とは、こんなもので酒が呑めるか、こんなもので飯は食えない、という人は、食物に必ず不自由をする人であって、呑みすぎ、食いすぎで体をいためるのは飲食にとらわれた人であります。また「名に住するものは名において自在を得ず」といいます。

すなわち名誉は必要でありますが、名誉にとらわ

れると、必ずそこから失態を招きます。その他あらゆるものが渋滞して、そこに囚われれば活動の自由を得ずですから、もしも住することがあれば、そこでみなそくばくされるのであります。ですから、一切事、一切法に住せざれるようにするには、まず、自分が自身にとらわれておることから捨ててかからなければなりません。「俺が」というものに捉われていると、なにものも自己中心につかもうとするのでかえって自分をあやまったことができてきます。ゆえにまず修養の本意は、自分を一ぺん捨てることであります。そうすれば、そこに更生した自分が生れます。すなわち今までなにごとにも捉われていた自分というものを一ぺん殺してみるがよいのです。ただし肉体自殺とまちがえてはいけません。いままでの捉われ根性を徹底的にほろぼすことであります。

そうすると今度こそまじめな、ほんとうの自分が生まれてきます。すなわち「大死一番すれば大活現成す」というのであります。ところが自分をすてるということは、なかなかむづかしい。しかしそこを思い切って捨てて、一たん仏心の無我に飛びこむとこんどは無我から出てきた自己だから、一切固着のとらわれをはなれて、自在の流動が得られるのであります。それなのに凡夫は、生まれたままの自己の執着に生きようとしますから、自我の衝突ばかりして、そくばくの生活にくるしんでいなければならないのであります。それでつぎに、

「空は住するところなきをもってよく活動す。故に本来空なるときは物に応じ機にふれて孤疑渋滞することなく、活動の自由を得ること、水中の月のごとくなるべし」と申してあります。

水中の月影には更に執着がありません。どこでもどんな水にでも、縁のあるところには影をうつしますが、しかしここは好いところだからはなれないとはいいません。全く渋滞も執着もない姿であります

そのように自分を一たん捨てよというのであります

北条時宗が元寇襲来の一大非常時にあたり、大力量を尽して、あの難局を切りぬけた。それを頼山陽

が「相模太郎智は神の如く、胆は斗の如し」と評していますが、その実時宗は生まれながら非常に臆病者であったといいます。それで時宗は自分の性格を知り、「こんな臆病なことでは将来執権職としてとても天下を治めることはできない。なんとかして修養しなければならぬ」と考えて、ついに祖元禅師について修養をはじめたのであります。

その最初の相見（対面すること）に「私は臆病者でしょうがないが、この臆病を直すには如何に修養したらよろしいでしょうか」と尋ねました。すると禅師は「臆病の出てくるところを防げばよい」という返答なので、「それならその臆病はどこからでてきますか」と問うと、禅師は措かず「時宗から出てくる」といわれました。すると時宗は……こちらがこまって尋ねているのに「時宗から出てくる」というわけがわからぬ。そこで重ねて尋ねますと、……「時宗おまえが臆病なのは自分に捉われているからである。よって時宗を捨てよ」と禅師からいわれてそれから自己を捨て修養に精進した結果、あの難局をみごとに切りぬけて、英名をのこす人物となったのであります。

およそ生命あるものは、のみでも、しらみでも自分への捉われがあるから命が惜しい。命が惜しいからおそろしい。おそろしいから精一ぱい逃げようとするものであります。それで自分を捨てると命も惜しくない。金も欲しくない。位も欲しくない。したがっておそろしいということもないようになって大胆な仕事もできるのであります。

西郷南洲が「命も惜くない、金も位も欲しくない者ほど始末にこまる者はない。しかしこの始末にこまる人間でなければ役に立つものではない」といっておりますが、その通りであります。それがどうしても自己に捉われると、個人主義になる。つかんだものは放さぬ。財産をつかんだら少しも放さない命は惜しくなる。まるで公共的には消極的になって国家も社会も無視する。

現在はそういう主義の者が多くなって、この世の中を混乱させております。

以下次号

観音行の実践

兵庫県
西正寺
光山　善雄

世間の苦を救う　つづき

衆生困厄を被むりて、無量の苦、身にせまるとも と経文にありますが、現代人は無量の苦、いろいろの苦悩に困っておることは事実です。困っているのは政治、産業、教育、宗教皆困っているのです。

金のないことよりも、「人多くして、まことの人少し」に困っているのです。

この困厄のため、無量の苦しみが身体にせまっているのが現代です。老少善悪の人々がこの困厄をのぞくには厄払いのみでは除かれません。第一に観音さまを信じ、観音と一体生活を実践し、「愛情と親切を与える人間となり、合掌、感謝生活の実行にあります。物に対して手を合せて拝む人、食物に対して手を合せる人でなくてはなりません。そうすることによって、

「此の地は安穏にして、天人常に充満」する。

合掌の花が一杯に咲きましょう。理想の空念仏でなく、安穏の浄土をこの世に建設せねばなりません。

苦の世界、悩みの多い人生であればこそ、観音さまの示現を必要といたします。飢えたる病には食が第一、渇ける者には水を与える、病める者には薬を与えよ。迷える者には真理の灯を与えよ。観音の大慈悲を信ぜせしめよ。

観音妙智力、能く世間の苦を救うとあります。

甘露の法雨

「神通力を具足し、広く智の方便を修して、十方の諸の国土に刹として、身を現ぜられざることなし種々の諸の悪趣、地獄、鬼、畜生、生老病死の苦、漸を以て悉く滅せしめ給う」

「神通力を具足」とあるが何か魔術のように考えられますが、そうではなくて面接したたけでその人の心がわかる。智慧と方便を以って済度教化下さる

が観音の神通力にして、十方の諸の国土に刹として身を現ぜざることなしとあるから観音の大慈大悲は全世界に充満し活動して下さるわけです。

久米の仙人が娘の白い足を見て神通力を失ったとありますが、生れて始めて美人の白い足を見たためかわかりませんが、女性の魅力は裸体美にあると西洋では申しております。

夏頃になりますと特に海水浴場には多くの犯罪がこの神通力を失う性犯罪がありますから平常より修養を心がけねばなりません。

○

諸の悪趣の世界とは地獄餓鬼、畜生の三悪道で、看板は立派でも地獄の会社、餓鬼の会社、畜生の会社があります。畜生の世界は食欲と淫欲しかなく理想がなく、文化もない、吾々人間生活貪欲、淫欲、排泄、睡眠欲等をくり返して日々を送っている人が多いが、食べるには食事作法があり排泄にも作法があります。睡眠も作法がある筈で一日中寝ておるのでは病人であります。

生老病死の苦、苦は人間としてのがれること出来ません。ですから観音さまと一体となり、その苦を解脱することです。即ち四苦が自然に解消するわけです。

「真観、清浄観、広大智慧観、悲観及び慈観に住し給う。常に願い常に瞻仰すべし、無垢清浄の光りありて、慧日諸の闇を破し、よく災の風火を伏して普く明かに世間を照し給う。悲体の戒は雷のごとくふるい、慈意の妙なること大なる雲のごとし、甘露の法雨を澍ぎて、煩悩の焔を滅除せしめ給う」

仏教の世界観は五つにおさまります。観とはさとること、心の中で観ること、感ずること、味わうことであり、眼耳鼻舌身と五つの働きは別々に見えるが観の一字におさまりましょう。天台では「一心三観」と申します。真観とは空観のこと、空観とは一物として常住のものはなく変化して行く、実は何もないのであります。

仮観とは世界に常住のものはないが、然し万象は六識を通じて、世界は存在するから、この世界を仮観と申します。空観は平等で、仮観は差別であるから、二者不二で一つのものの両面の観方でありますから、空観と仮観とは平等にして差別、差別にして即ち平等であります。

何事も因縁になりて、生ずることで、因縁を取り除くと空と云うことになります。この世界を空と観るのが平等、有ると見るのが差別の仮観であり、空でもなく、有でもなく、平等にも差別、差別にして平等、空にして空ならず、有にして有ならず、空仮二観の上に観せられ中、道観が「広大智慧観」と申します。この空仮中の三観は人間心の中に備っています。要は一心三観とは悟った心を意味し、その悟った心が、利他行となりますと「悲観と慈観となります。慈観は与楽で、悲観は抜苦であり、この五観を拡大いたしますと、百にも千にも拡大されます。

「常に願い常に瞻仰すべし」で敬虔な信仰を忘れないで観音さまを合掌することです。

「無垢清浄の光」とは観音さまのことで、慧日とは智慧の日と云う。諸の闇とは煩悩のことであり、災の風火とは貪欲の火、愚痴の火、瞋恚の火、荒れ狂う風に等しいと示されて、これらの三毒の風火の災を悉く、打ち伏せ下さるか観音の清浄の光です。

「悲体の戒」とは抜苦にあたり、慈意は与楽にあたります。慈悲の身体は実に尊いもので、自分を観音さまの分身と自覚したら、この身体は観音の一部分であるから大切にして社会に奉仕せねばなりません

○

観音様は仏の戒法の着物を着て、ある時は雷の如くきびしく、ある時は大雲が空を蔽っているように慈悲の雲で蔽って下さる。摂取不捨の慈悲であります。悪事をせんと思っても戒の雷がゴロゴロなり出しますと悪事は善事に早変りいたしますから、観音の信者は悪事はできません。「甘露の法雨をそそいで煩悩の焔を滅除せしめ給う」とあってこれは観音の口の説法にあたりましょう。甘露の法雨は万物をうるおす働きを持っています。

（以下次号）

西遊記（其の三九）

岡部千三

天竺　つづき

王の病気

悟空は、国王の家来につれられて、大手をふって城の中へはいっていった。

朱紫国の王は、わがまま者で、せつかく悟空が、病気をなおしてやろうというのに、どうしても、あいたくないと云いはっていた。あわなくては、だいじな診察ができない。けらいたちは、こまりきって悟空にそうだんした。

「よろしい。はなれたところから診察しましょう糸脈と云いましてな、糸で脈をはかるのだ、やぶ医者にはできない、むずかしいやりかただが、わたしは名医だからな」

悟空は、三本の毛をぬいて金の糸にして、役人にわたし、王の手首に結びつけさせた。そして、一方の端を、悟空がにぎっていたが、もつたいをつけて

「王さまは政治のことに心をつかいすぎて、あたまがおつかれになったのだ、それからからだをうごかさないため、胃のはたらきがよくない、病気というのは、たったこの二つだ。」

「なるほど、そうでしょうなァ」と、家来たちは感心した。

「くすりをあげたいのだが、ここには持っていない。町じゅうのくすり屋から、店にある薬ぜんぶをあつめてくれ、まぜあわせて、あたらしい薬をつくりたいのだが、どうだ、あつめられるかな」

「できますとも。なにごとも王さまのことですから、すぐに、おとどけします」

家来は、くすり屋をかけめぐって、いろいろなくすりをあつめ、車にのせて悟空のところへ引いてきた。そのくすりで悟空は、ころころした黒い丸薬をつくって、さっそく王にすすめた。

「これは烏金丹といいまして、どんな病気にもよ

くきいて、これを飲めばけろりとなおるという。ふしぎな妙薬だ。わたしのいうことにはまちがいない」

「いや、それはありがたい。」

家来たちは、いやがる王にこの薬をすすめてのませた。ごくりとのんだ王は、たちまち元気なそしてはればれとした顔になった。

見ていた八戒は、おどろいて云った。

「ふしぎだなあ。悟空のきょうだいが、そんな名医だったとは、薬もつくった。……妙薬を……きょうまで、ちっとも知らなかったよ。」

「あの薬には、わしのつばがはいっているのよ、だれにも云うなよ、ひみつ、ひみつ。」

悟空は、声を小さくして云いい、くっくっと、おかしそうにわらった。

三つのすず

病気のなおった朱紫国の国王は、悟空たちを客にして、さかんなおいわいの会を開いた。

「さあ、ゆっくりのんでくれ、ごちそうが足りなければ、いくらでもつくらせよう。」

「もうけっこうです。わたしたちは、ごらんのとおりの出家です。天竺へ経文をとりにいく旅のとちゅうですから、こんなにだいじにされると、まるでゆめのようです。」

悟空も、ときにはおせじを云った。王にこんなことをいっているそばでは、くいしんぼうの八戒が、でてくるごちそうを、かたっぱしからむしゃむしゃたべ、たいこのようにふくれた腹をさすっている。と、外でけたたましい声がおこった。

「火事だぁ、西門が火事だぁ。」

びっくりした王が、立ちあがろうとしたとき、悟空は、手にもっていたさかずきを、天じょうめがけてさっとなげあげた。王は、はっとしたようすで、

「なにをなさる。酒が気にいらないのか、それとも、さかなが口にあわないのか。」

いくらか、腹をたてたようである。

「いやけっして、そうではございません。わたしが、なぜさかずきをなげたかは、すぐおわかりにな

りますよ。」
そういっているところへ、いそいで、一人のけらいがはいってきた。
「王さま」……
「おお、西門の火事は、いかがいたした。」
「はっそれが、まことにそしぎでございます。きゅうに風が吹きだしたかと思うと、大雨がふってまいりまして、あっというまに、消えましてございます。」
「なにっ、大雨が……。」
王は空を見て、ふしぎそうに云った。外はよくはれて、雲一つないよい日だったのに、……
「ははは、わたしがもうしあげたのは、そのことです。」と悟空が、さもゆかいそうに云った。
「わたしのなげたさかずきの酒が、雨にかわって火事をけしたのです。」
「えっ。」と、王はびっくりした。
家来たちも、おどろいた。
「そういえば、雨がふったとき、酒のにおいがしました。わたしなどは、そのにおいで、すこしよっぱらったようです。からだがふらふらします。」
「おそれいった。あなたの仙術には、二ども助けられた。ついでといってはもうしわけないが、もう一どたすけてくれぬか。」と、王はきまりわるげに云うのだった。
「とおっしゃると……。わたしにできることならば、おやくにたたせていただきましょう。わたしは人のこまるのを見ていられないたちです。どうぞ話してみてください。」
悟空は、ひとひざのりだしていった。
「南へ三千里いったところに、賽太歳というばけものがいて、人々をおどかし、若い女などをさらっていく、金聖宮という女官もつれていかれてもどらない。きょうの火事も、賽太歳の子分のしわざだと思う。しかし、わたしの家来どもでは、とらえることができないため、いい気になって、わるいことのしほうだい。あばれほうだいのこまったやつです。
（以下次号）

田舎医者（其の二十五）

見川鯛山

檻

つづく

母ちゃんが鉄砲で払いのけると、私はその筒先にしがみついて云った。

「馬鹿な真似すんな。犬殺しでも、あんたが殺ば人殺しだぞ」

「犬、殺られたのか」

「ンだ!! 俺とこのクロを盗りやがっただ、そんだのに、うちのグーダラ、文句ひとつ云えねぇだ、てめえの大事な鉄砲犬のくせによっ!! だから俺、追っかけてって取り返えしてやるだ。さ、その手をはなせ!!」

母ちゃんがパッと、鉄砲を引っぱったら、私がよろけた。力づくではとてもかなわないのだ。だから

また、私は大声で云った。

「暴力はやめる。口で云えばわかることだ。鉄砲はいかんぞ、テッポウは。

そんなもん持ってぐと、ジュウ、ホウ、トウ、フホウ、ショジザイ……」

その罪状を、私が説明はじめたら、せっかちに母ちゃんが怒鳴った。

「ブッブッと、念仏みてえなことを云うな!! 俺ァ殺すと云ったら殺すんだ!!」

と、その鉄砲を振りかざし、くるっと私にけつを向けてダンプカーのように走りだした。

「待てっ!!」あわてて、私がそのダンプカーにとびのったら、母ちゃんの大きなお尻で、私は地面へよつんばいに弾き返されていた。

私はすりむいた小僧をペロペロなめて、大いそぎでそのあとを追った。
村役場の前に人だかりがしていた。野次馬の輪の中で、もう母ちゃんの声が怒鳴っていた。
「さあっどうする気だ、うちの犬、返すのか返さねぇのか!!」
すると、犬殺しがボソボソと口の中で云った。
「なんだと?はっきり云えはっきり!!」
「だから俺、さっきから云ってべ。御用邸さ陛下がおいでんなる前にァ、毎年いつだって、野犬狩りしろって命令されるんだから」
と、犬殺しが精一ぱいの声で云ったが、ふるえていた。
「天皇陛下がそう命令するのか!!」
「いや、保健所でそう云っただ」
「天皇陛下は犬がおっかねぇって云うのか」
「俺、そんなこと知んね」
「ふん、なにをビクビクするだァ。俺とこのクロは兎よりおとなしいだぞ。それに、年よりでロクな歯もねぇだ。そんな臆病犬とっつかめえて、どこがおっかねぇちゅうだナ、爺さまだから少し気むずかしいだけだわなァ!!」
「それみろ、その気むずかしいってのが怪しいんだ。狂犬かも知れねぇ」
「うちのくろが狂犬だと? こん畜生、オメエたち何のために、しょっちゅう、狂犬病の予防注射ぶちにくるんだ。無理やり注射ぶって二百円もかせいでぐじゃねぇか!! ついこないだゼニ取られたべぇだぞ、なあみんな」
と、母ちゃんが怒りにふるえながら、ぐるっと、野次馬を見廻し、そして私をみつけた。
「医者さま、いいとこサ来てくれた。この野郎がうちのクロこと狂犬だとぬかすだ、クロは狂犬病でねえよなあ?」
「さあ」
と、私が考えると、
「なにがさあだ。こん畜生の前ではっきり云ってやってくれ、な狂犬でねぇべ?」

「でも、私は犬のことあまり知らない」
ヤブめ!! と母ちゃんの目が私をにらめつけ、そしてまた犬殺しに云った。
「この医者なんにもわかんねぇだ。でも俺にァわかってる。狂犬なんかじゃねぇだ。だいいち、オメエ、クロは野犬じゃねぇ。みてみろ、ちゃあんと首輪つけてるだぞ。オメエが掴めぇるなァ飼い犬ばかしでねぇか、野犬狩りだらほんとの野犬をつかめぇてみろ、ウスノロめ!! さあ、クロを返えせ、そのトラックから下ろせ!!」
「駄目だ、役目は役目だ。ぜったいに返えすこと出来ねぇ、俺だって男だ!!」
犬殺しが、まだふるえ声で負けずに言ったが、彼は栄養が悪く、背のびをしても母ちゃんより小さい
「どうしても駄目か!!」
と、彼女の目が坐り、その目でぴたりっと鉄砲のねらいをつけた。
「危い!!」
私は叫んで、慌てて耳をふさいだ。その時、後の男が私の耳もとで言った。
「心配すっことねぇだよ先生」
ふり向いてみると、それは母ちゃんの亭主だった
「おお、あんたいつの間にここへ来てた? さ、早く行って母ちゃんを止めろ」
と、私が父ちゃんを前の方へおしだしたら、彼がモジモジ尻ごみしながら言った。
「だァめだ、いま俺が出てったら鉄砲でぶんなぐられちまうだ。あいつ狂犬みてぇだ、狂犬病の注射あいつにぶっときァよかった。」
「だってあんた、母ちゃん本気でぶつぞ」
「ぶったって平気だ、どうせ弾出ねェだ」
「なァんだ、空砲なのか」
「いいや、空砲じゃねぇだ。ちゃァんと実弾こめてあんだ。でも去年の不発弾ばかしだ、火薬しけてだめな奴ばかしだわナ」
父ちゃんは落ついたものだった。
その時、母ちゃんの鉄砲はぴたっと犬殺しの顔をねらい、引金に指がかかった。
（次号）

鳥居観音だより

終った行事と参拝状況

春季例法要盛大に修行　四月十七日（火）

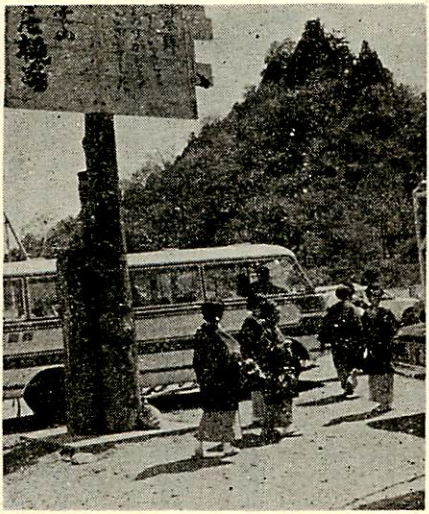
午前十時　名栗、梅花流御詠歌会員五十名が本堂に参堂直に、名栗、梅花流会員五十名により、ご詠歌、観音和賛が奉詠され、役員、講員、多数列席の中、本堂正面中央から導師尾尻老師と有馬、鯨井両老師が参堂、折から開祖平沼先生ご夫妻も入堂されて、本堂内は参列者で満ち満ちた。

献香、法語、読経堂内は咳一つなく、観音様と、参拝者が、一体となったような静寂であった。

焼香は開祖先生ご夫妻につづいて、平沼家当主、埼玉トヨペット講元梶谷様、日本火災海上保険様、浦和講、所沢講、飯能講、青梅講、東京の各役員、名栗の世話人、参拝者と進められ、やがて読経が終ると、詠歌奉詠があって終了した。

本堂で平沼先生から簡単に、ごあいさつをいただいたが、御一同が、先生のにこやかな、お元気の様子をごらんになって、おたがいに笑みを交しながらごあいさつを交わされたのも、たのしい状景だった

十一時救世大観音の法要となった。全山のつつじの真盛りと新緑の香と、救世大観音の和顔とがのどかな中にとけこんで、一段とかがいた。



（ご詠歌に来山の梅花流の婦人）

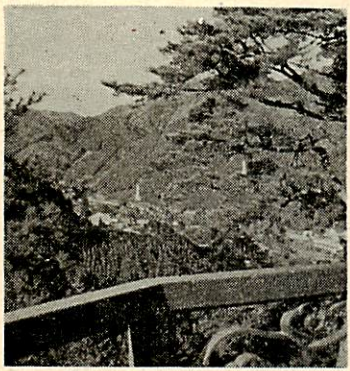
四月十九日　横浜の坂口様外多数来山。山門建立の水もりのため小林氏来山。

四月二十一日　与野市の松本喜光氏祈禱に来山。写経奉納三十巻あり。

四月二十二日　飯能市サイタ製作所大人一五四名小人五一名、所沢市四一名、其他三〇名団体と。埼玉トヨペットコロナ会入山。

春の入山最高。

四月二十六日　川越市福原小学校三年生、二二六名入山。



（平和観音から見おろす村落）

其他一般来山多し。

新緑が目にしみるようう まい空気ふりそそぐ大陽のぬくもりたのし。

四月二十七日　関八朗氏、般若心経百巻の奉納。浦和より団体入山の下見に来山。一般入山多し。

五月三日　庫裡の附近紅つつじ見頃となる。好天気、自動車多し。

平沼先生夫妻来山。入間市吉田様外来山。

五月四日　山門の建立工事始む。

五月五日　子供の日　入山朝より多、子供連れが多い。自動車入山三〇〇台突破。

大小人　五〇〇人。

五月六日　連休で入山多く。前日に次ぐ

一万体、折本申し込み多し。

五月七日　板橋郡司みち様外二名来山。

流灯申し込一号　一般参拝多し。バス三台。

五月十一日　東京立体写真像より来山。

本堂内像見学と胸像撮影。バス二台で団体入山。

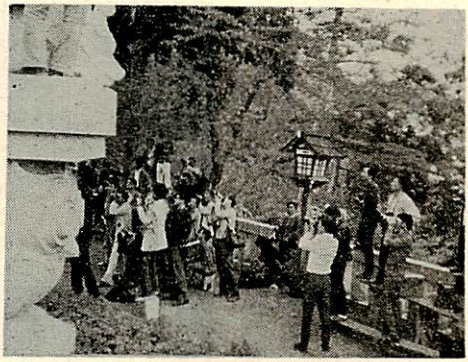
全山のつつじ真盛りとなる。

五月十八日　今津様、柏木様、山本様来山。

その他一般入山多し。バス三台。

一万体観音申し込　五体受。

五月十九日　山内に団体入山。
写真をとる者多し。
山の風景と建物の風変りがよいと、若い多くのカメラマンが話していた。新緑の中に紅のつつじが目につく。まぶしいように陽がさしていた。

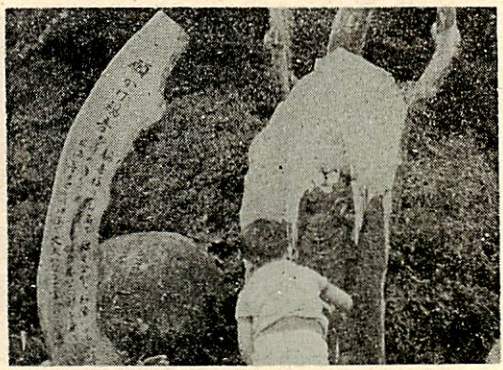

玄奘三蔵塔の内庭

五月二十日　松田江畔先生ご一行来山。四五名。ご一行は、書を書かれる人達で、松田先生を囲んでいろいろなお話をお聞きになったり、書を書かれたりした。もう松田先生の書は格別のものだが、同行の人も、筆の運びもなめらかに、お書きになった。
当山の庫裡は、書を書かれるには最適である。
江古田よりとみ子奥さん来山。松田先生のお話を熱心におききになっていた。
五月二十一日　江古田老人クラブ二十五名来山。志賀さん祈禱の申込五枚。他多数。
尾尻老師の本堂での法話をたのしく聞かれた。庫裡で休けいされ、後山内一巡下山なさった。
五月二十二日　夏のような暑さとなる。流灯の申し込ぼつぼつあり。
参拝者数多し。
五月二十六日　東京江端政吉様外十五名来山。観光バス二台。マイクロ一台来山。
五月二十八日　平沼先生夫妻来山、鎌倉時代の仏像一体持参。第二文庫に納む。
五月三十日　飯能市　小川文雄様来山。流灯の申し込十灯あり。一万体申し込一。
六月三日　山門の基礎セメントねり込みす。塔婆供養の申し込案内状発送。
六月七日　江崎元堂ご夫妻来山。塔婆申込受る。高尾山の老師のご紹介で小金井市吉田様、東松山

中里様来山参拝多し。

六月九日　本堂前の願かけ観音に、願をかけた方が、おかげ様で全快しました。と、礼参りに来山。皮が変色したので願をかけたのが、一月前だったとのこと、事務局へも立寄られ、水かけ観音を拝んで帰られた。

この願かけ観音は、朝霞の広瀬秀雄様が上野にあった石彫の聖観音が、気に入られて購入され、当山に寄進された、珍らしい観音様で、参拝の人達が、水をかけて、お体を洗っては、祈っている。



願かけ観音に水をかけて祈る参拝者

六月十四日　東京寺尾長吉様から塔婆供養申し込多数受付、参拝バス二台、入山者多し。

六月十五日　入間航空自衛隊歩行訓練で入山参拝一〇〇名。

六月十六日　子のごんげん、沢井老師来山。

飯能市平沼様外塔婆申し込多数。

東松山市中里勇吉様来山。

六月二十一日　東京、江端政吉様塔婆申し込多数

六月二十二日　昭和五十四年度役員会

十時　監査会　出席者　武居藤吉、平沼幸一両氏

十三時役員会　平沼康彦　有馬忠直　尾尻天外　岡部千三

吉島会計事務所長　高木係長説明

六月二十七日　暑気毎日高まる、三五度となる。

一万体の申し込四体あり、自動車入山多し。

塔婆供養の書き込み開始。

七月一日　入山客多し。

塔婆供養申し込多数となる。

七月三日　埼玉トヨペット講より塔婆供養申し込

四百三六本最高申込あり。

七月五日　練馬、井野雅史様来山。

流灯申し込者、吉田健、高橋邦子、岩崎レン、山本芳枝宮沢庚子生の諸氏。

七月九日　開祖平沼先生夫妻来山。

夏山の救世観音、本堂参拝なさって三時帰宅さる。

七月十日　小林政勝、渡辺勇夫妻、倉田、原田愛助、市川貞治、平井敏治、武関様。小山権之丞、田中義人、石毛銀一、各位から流灯申込。

七月十六日　塔婆供養、午後二時、救世大観音、堂宇内に申し込みの塔婆、五二四本を飾り、海山の物を供え、導師は尾尻老師が修行された。

七月十七日　吉日なので、庭師の鈴木源一さんと庭石店の加藤辰作さん親子三人で、銅像周辺の整地と配石を開始した。石栗の大きな自然石がクレーン車で楽々とつりし上げられ、工合よく置かれていく植込みは秋彼岸に花木も植えるよう進めた。

流灯供養のお申しみも毎日郵送されて来る。

親しい方々からのが次第と殖えて来た。

七月二十五日　庭作りも進行した。

流灯のお申し込を、平沼幸一、鈴木源一、坂口野口茂平、増田守男、斉藤郁夫、浅見光雄の諸氏からそれぞれ多数まとめていただいた。

七月二十八日　流灯のお申し込と来山。

名栗中学校長馬場正一郎、同和自動車井上政雄、平井敏治、高橋謙吉、大友清司、佐々木藤次郎の諸氏。

七月三十一日　流灯お申し込、山上喜久江、高田与志子、大和拓友会、浜田幸雄、吉田健、吉田仙太郎、六本木初代の諸氏から多数受く。

八月一日　夏休みなので家族入山多し、暑いとは云っても、山内の涼風は味がある、と云っていた。

流灯お申し込多し、吉田武彦氏外九名、堀沢幸正石井芳次郎氏外十五名、岡部健一外十名、枝久保鶴四郎外十九名、佐野正助外十六名、小池清、松井吉雄外四十名、以上受付。

八月五日　流灯受付、浅見倫一郎外七名、小久保伴吉外三名、松下愛吉外十名、岡部仲次郎外十五名

八月六日　埼玉トヨペット講より四一一灯の申し込をいただいた。
矢島武一外九、花林とく、小林利一郎、増岡ヨネ
岡部安一外七等受付、入山者多し。
八月八日　流灯申し込、小林頼四、石井利司。
浅見万次郎、浅見達次郎外十二、服部雄次外七、
関橋洋之助五、来山。
八月十三日　月おくれ盆、魂迎えである。
盆おどり会場、花火、流灯の準備に着手。
境内の百日紅が今盛りである。古木と若いのとは同じでない。花の色が異っている。
参道、本堂、周辺に赤白の提灯がつるされた。
八月十四日　法要の準備が本堂にも毎日された。
開祖平沼先生も来山、参拝の人達と救世観音で、顔を合わされて、初顔の人が、先生にお合いできたことをよろこんでいた。
先生ご夫妻のお元気なのにおどろきの目を見張っていた。
救世観音の堂宇内は夏でも涼風が吹いていた。

八月十六日　流灯法要
毎年たのしみにしている、流灯法要が来た。
東京都瑞穂町の一団が飯能からタクシーに分乗して、十一時三十分到着、センター一泊の予約有。
午後三時東京板橋の大山講元榎本みや子さんが一団五十五名引卒でのり込む。
午後三時三十分、開祖平沼先生ご夫妻おつき。
午後四時三十分　本堂の法要修行。
導師、尾尻老師、随喜、有馬、鯨井両老師、参列者入堂して待つ。
堂内には千数百の絵灯ろうが飾られて、電灯にかがやいてうつくし、たのしい。
川越の一団到着、堂内に案内す。
続経のうち、焼香が進められ、次々と参列者が、進まれた。
三人の老師が申し込の施主を読み上げられるのが大変である。
読み上げが終ると、
開祖平沼先生から簡単ではあるが、ごていねいな

ごあいさつがあり、次いで導師の尾尻老師から盆の行事、流灯について、法話を聞いた。

終って、この灯ろうは、名栗川畔へ運ばれた。参拝者にも手伝っていただいので大変にはかどった。

流灯も、三人の老師の読経のうちに、ろうそくに火をつけて、静かに川面に流された。

「皆さん今晩は、名栗のお盆です。泊りに来られた仏様が、皆様のお家の安泰をごらんになり、そしてごちそうになって、供養をしていただいたので、この流灯にのって十万土へ帰られるのです。

二つ三つ並んで仲よく、ゆっくり参りましょう。と云う様子のもあれば、一つおさきに失礼します。と云ったような流灯もあります。」

そんな解説もマイクを通してあった。

読経……鐘の音、川瀬の音、黙して見入る人々の顔が夕闇の中に浮ぶ。

次々と流灯されて、名栗川の天然プールは一ぱいになって花が咲いたようである。

上りました花火です。光です。煙です。

仏さまはやがてこの煙の中に消えて行かれます。

又花火が上る。夜空に高く五色の光が明めつして、静もる。

やがて川をまたいで仕かけ花火が始まった。

音、火花、さくれつする玉、紫煙、黄煙、白煙の中に銀のすだれの滝がおちる、煙……そのおくへ仏さまは消えて行かれた。

それから次々と花火はうち上げられて、観客は川原に橋の上に、ぼうぜんとしていた。

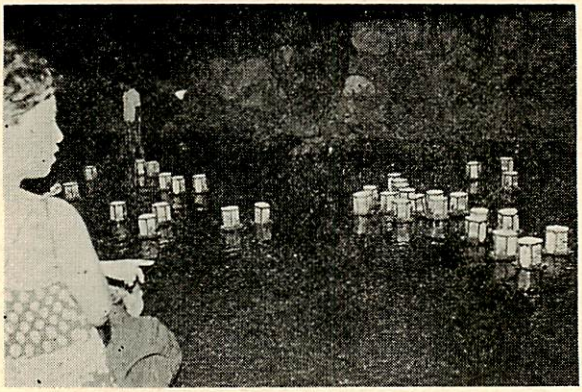
午後八時から、観音広場で、盆おどり大会が開始

された。

空には花火がつぎつぎと打ち上げられ五彩が浮び、消える。

観音広場中央に組まれた、やぐらは花にかざられ、赤白の提灯に電気が入ってなまめいたいろどりである。広場のかたわらには夜店が数軒出て、食物、飲物、玩具等うつている。子供達はそこへ集まって、母親にねだっているのもいた。

マイクから流れる民謡に地元の民謡愛好の人達が



浴衣姿も涼しそう。やぐらを囲み円陣をつくって、炭坑節、花笠音頭、新東京音頭、つづけざまに踊った。見る人、踊る人で広場は一ぱいになって、人いきれがするようだ。

やぐらの上では肌ぬいた男二人が変る変るに、ばちさばきも上手に太鼓をたたきつづけた。

東京からの参拝の人が、この村にこんな素ばらしい行事があるのは珍らしいことだ。うつくしい流灯に心が洗われる思いと、花火に心が躍動し、盆おどりに心が和らいで、たのしい盆の夜の一時をすごすことができたと、よろこばれた。

八月十八日　バス五名、入山多し、青梅、八王子方面から秩父へのドライブコースがよくなったので途中参拝する人が多くなった。

一方秩父から青梅、八王子方面への車も多くなったので、その人達のお参りもふえた。

八月二十二日　朝早く浦和から子供会の方々が、入山になった、お子さん達は町からこんな静かな山へ来たので、先をあらそって行った。

こうして夏休み中、いろいろな人達が、町をはなれて、やって来られるが、町では見られないところが珍らしく、心もおちつくらしい。そして気に入ったから来年もと云って来られる人が多くなった。

八月二十三日　埼玉県書道連盟理事大野先生が、十名ばかり書道の先生を案内して来山、文庫内の書や沢山の陳列品を見て興じられた。

八月二十五日　本道参道入口に新しく建てられた山門の附近の地ならし整理が佐野建設の手で施工された。駐車場も山門前に広くとれたので、参拝の人には便利となった。

きちっと駐車場から、入口山門へと、姿がととのったので一変した。

九月一日　バス三台で秩父からの帰りに参拝。

九月五日　飯能駅前から国際興業の名栗バスで、旅行愛行会の方が二十名来山、皆各霊場を巡拝されているので、当山の観音様は初めてだが、素ばらしいと云って、ゆっくり参拝された。どなたも寺務局で熱心に集印していられた。

九月十五日　参拝客多し。

九月十六日　前日に引つづき入山多し。

九月二十三日　東京俳句会の団体入山。

九月二十四日　秋彼岸中日、彼岸法要午前十時、本堂にて修行、午後一時三十分、念仏会開催、地元の婦人達によって念仏を唱えた。

これからの行事

秋が深まると当山の紅葉がうつくしくなる。

十月十五日　紅葉狩開始、山内に提灯をつるす。

参拝者が作句されたもの、村内の句会で作られた句を短冊に書いて紅葉の枝につるして趣情をつくる。紅葉狩は十一月末で終了。

当山ではこの季節が一番入山参拝者が多いので、一同心切をモットーにつとめる。

十一月三日　開祖平沼先生の寿像、とみ子夫人の胸像の除幕式が計画される。

当山開創に魂身をささげられ開拓と彫刻に信仰を以て寝食も忘れて先生ご夫妻が奉仕されたことが、

広くみとめられた証である。

十二月十日　大黒祭　本堂　十時

大黒殿から本堂に移されて、今後まつられる。

十二月三十一日　除夜の鐘、一年を反省、来る年へのおねがいを午後十一時三十分、本堂で、十一時五十分　大鐘楼で、百八の鐘を参拝の人についてもらう。この行事にご参加下さい。

昭和五十五年一月元旦祈禱

新年、元旦祈禱と云います。

各篤信各位、講元各位におねがいして、元旦祈禱を盛大に修行いたします。

とき　五十五年一月一日十時　本堂

願旨

家内安全、商売繁昌、各種試験合格、安産、縁むすび、当病平癒、旅行安泰、其他、お求めに応じて修行します。

祈禱料　金壱千五百円、弐千円、参千円以上

祈禱後庫裡でとそ雑煮接待いたします。

平沼先生寿像建立協賛芳名

（第三号　四・九・一〇　敬称略）

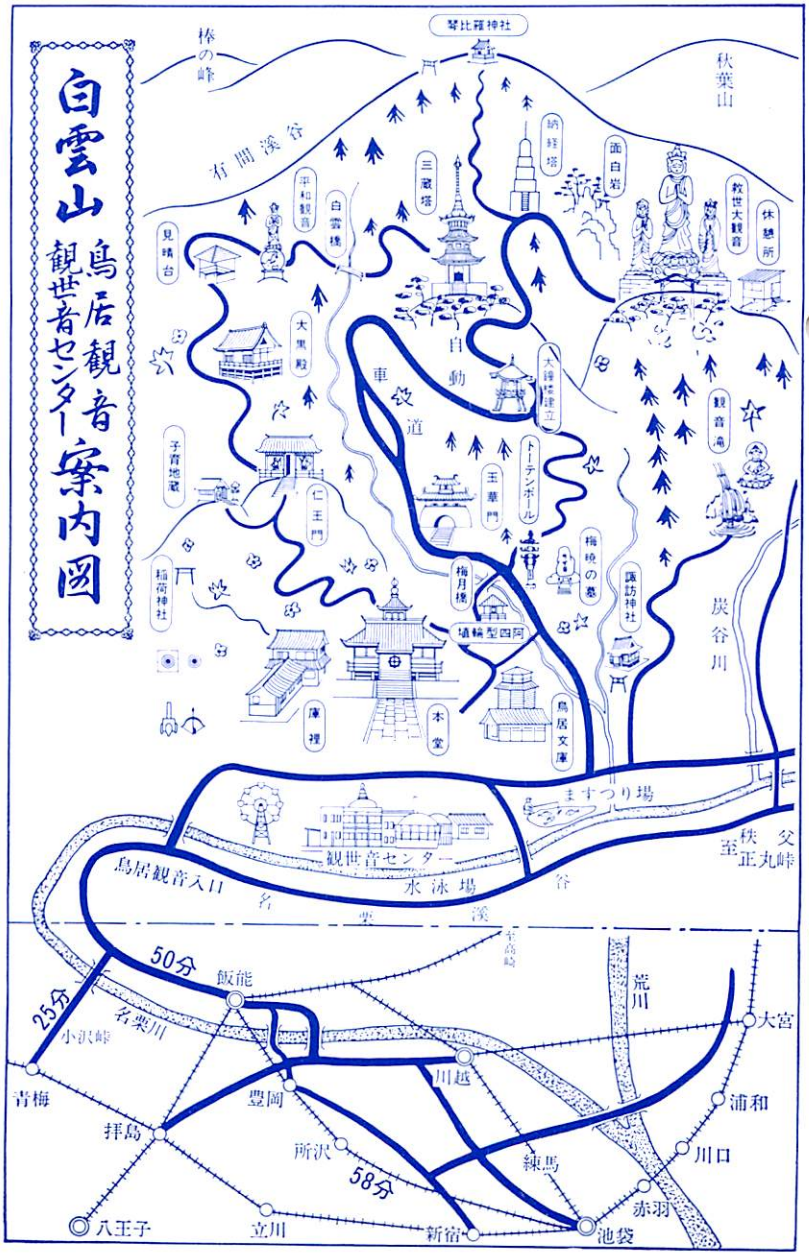
金額（千円）	住所	芳名	金額（千円）	住所	芳名
一〇	名栗村	町田　芳三	一〇	鎌倉市	宗像　玉子
一〇	同	浅見逞次郎	一〇	港　区	松野たき子
一〇	同	枝久保鶴四郎	二〇	清瀬市	堀沢　幸正
一〇	同	吉田仙太郎	五〇	清水市	松田　江畔
一〇	同	平沼　清儀	一〇	名栗村	松下　愛吉
一〇	同	岡部　安一	一〇	同	野本　栄治
一〇	練馬区	安田　静江	一〇	同	鯨井　孝彦

右表計　一四名　一九〇、〇〇〇円

総合計　一、六八六名　一八、六一四、五〇〇円

とりゐ　第四十六号　発行日　昭和五十四年十月一日
編集兼発行人　埼玉県入間郡名栗村　鳥居観音　岡部　千三
印刷所　浦和市仲町二―八―十五　武州印刷株式会社
発行所　鳥居観音　電話　〇四二九七―九―〇四一七

白雲山 鳥居観音 観世音センター案内図



秋の行事

●紅葉狩り　10月15日　11月30日

年毎に紅葉がよくなりました。
全山の楓はその数を知らずいろいろな
色彩を展開します。

●開祖平沼桐江先生ご夫妻寿像除幕式

11月３日　　10時30分
導師　総持寺　松浦英文老師来山

●秋季大祭、山門落慶 併せ修行

11月３日　　10時

新年のお知らせ

●昭和55年元旦祈禱

12月からお申込受付、
昭和55年１月１日～３日　10時
４日祈禱札配送開始
（お問合せは　TEL　04297－９－0417）